

つた程であつた。金堂の内部は組物や梁に紫檀を用ひ、蒔繪・螺鈿を施し、寶玉を鏤め、壁には釋迦八相・金剛胎藏曼荼羅・飛天などを描いた。本尊は定朝が畢生の大作三丈二尺の大日如來を安置し、佛壇・蓮座は彫刻と寶玉にて限りなく裝飾し、本尊の兩脇には二丈の釋迦・藥師・文珠・彌勒の像を安置した。金堂の前には加茂川の水を引いて池をつくつた。金堂の左には阿彌陀堂、右に五大堂、東に藥師堂、藥師堂の北に釋迦堂、その他千手堂・文珠堂・法華堂・戒壇堂・眞言堂・三昧堂・圓堂・大塔・鐘樓・經藏・僧房・浴室などあつて、その結構實に壯大なものであつた。

國史大辭典
（黒田鶴心）日本美術史講話
による

出所

榮華物語——第十五帖——疑の巻

作意
道長が全力を盡して法成寺を造營したことをまづ客觀的に描寫し工事に就いてはかなり寫實的に描き、道長に對する人物觀や批判はあまり加へないで、たゞその權勢のすさまじきをいひ、それを佛教に結びつけてゐる。

解釋

【今は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば】

道長の病氣もすつかり恢復して今では心持も平常と同じやうになつてしまつたから。

【おぼし急がせ給ふ】『おぼし』は意志の方からいひ『急ぐ』は客觀的にいふ。

【國々】國々へ賦役を仰せつけたのである。

【さるべき公事をばさるものにて】いろ／＼の公事はそれぞれ大切なものではあるが。

【仰言】おほせごと。

【御前】おまへ。

(1) 貴人のまへ。

(2) 敬語の二人稱。後には輕蔑の意味が生じてきたが、

今でも邸には敬語として用ひられる。

(3) 三人稱の敬語。貴人の前といつてその人をさす。

(4) 『ゴゼン』と読んで二人稱・三人稱の敬語。(男子に用ふ。女子・僧侶のときはゴゼンサマといふ)

【我が願のかなふべきなめり】自分の生ながらへることができたのは、生きのびてゐて日頃の願ひとしての造寺を成就させる爲めに佛が冥護されたやうである。『なめり』は『なるめり』『めり』は『見えあり』の約にて『そのやうだ』といふ意。

【別事】こと／＼。

【他事】こと／＼。

【たゞ御堂におはします】主語が省かれてゐる。たゞ御堂のことにはかり心があるの意。

【さま／＼におほしおきて急がせ給ふ】『おきて』の意味が二つに考へられる。

(1) 考へておいて

(2) 計畫を立て、

『おく』は物を置くといふ意味から『掟』の意味に働く。増

鏡では明かに後者の場合である。

新院は同じ御心にてよろづ軍の事などもおきて仰せられたり

あづまよりいひおこするまゝにかの二人の大將軍はからひおきてつゝ

この場合の『おきて』は名詞でないことはその後につゞが附いてゐる點から明にて、形式の上にては助詞『て』を挿んだ二つの動詞であつて、例へば『遊びて歸る』『行きて見る』と同じことである。『おきて急ぐ』も同様な形式である。その意味を二つの内何れにとるかによつて、この連続した三つの動詞の切方がちがつてくる。即ち

(1) いろ／＼に考へておいて、急がせる

(2) いろ／＼に考へ、命令し急がせる

(3) いろ／＼に考へ命令し急がせる

卑見では文章の上に甚しい非論理を極めてゐる作者のことであるから、恐くは(3)の場合であらう。

【急がせ給へば】お急がせになつてゐるので、『給へば』といふ已然形十ばは原因の意味が可なりある。

【夜もすがらは】『も』を軽く見て『は』を重く見ねばならぬ。即ち『夜は』の意である。而してこの『よもすがらは』は『山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽えなめさせ』のあたりまでにかゝり『作りつけ』まではかからず『雞の鳴く云々』までは勿論かゝらない。甚だ非論理的である。

【山をたゝむべきやう】 山を疊む(築く)様子
【池を掘るべきさま】 池を掘るさま
【木を栽えなめさせ】 一本には『うゑなへ』とある。意味は共に『並べ』である。『馬なめて』は萬葉特有語である。玉き春内の大野に馬數(なまひかず)而(な)あさふますらむその草深ぬ

馬並底(なまひぞ)いさうち行かなしぶたにの清き磯まによする波見(な)に
馬屯(なま)而(な)うちむれこえきけふみつるよしぬの川をいつかへり見む
後世には『駒なめて』駒なへて』といふ。
駒なめていざ見に行かむ故郷は雪とのみこそ花はちる

(17卷)
(1卷)
(9卷)

らめ (古今 春)

駒なめて花のありかを尋ねつゝよもの山邊の梢をぞ見

【御堂々々方々さまんく】『いろく』といふ意味をこの三つの反覆語にして示したのである。
【御佛はなべてのさまにやはおはします】 反語。
【そなたをば】 佛像を安置する場所を。
【馬道】 メダウ。横に厚い板を敷き渡して廊の如く通行するやうにしたもの。必要に応じては奥まで馬を引き入れる道とするから馬道といふ。後には長廊下をいふ。又一説には間通(まどほし)の約にて殿中の多くの間を貫通した板敷をいふ。
内裏についていへば



【参りまかで立ちこむ】 三つの動詞を重ねたるに注意。思しおきて急がせと同様な趣である。
【さるべき殿ばら】 道長の子供たち及びその他。
【宮々】 道長の女にて宮中へ上がる方々。その他諸王族。
【御封】 みぶ。『ふ』は封戸(フゴ)の略。『み』は敬語。昔は親王以下諸臣は位階・官職・勳功に応じて民戸を賜つた。地租はその半分を所得とし、庸調はその全部を所得した。それ故こゝでは自分の封戸から庸として人夫を出したのである。
拾芥抄(中末)によれば

形容詞	寝	助詞	寝	打消
不	い	こそ	れ	られぬ
可	い	の	れ	られぬ
能	い	の	れ	られぬ
意	い	の	れ	られぬ
志	い	の	れ	られぬ
安き	い	の	れ	られぬ
似	い	の	れ	られぬ
し	い	の	れ	られぬ

【廊】 ラウ。寢殿づくりにて寢殿と東西の對(か)の屋とを結びつける細長い建物。
【渡殿】 ワタドノ。二つの建物をつゞける廊下。
【雞】 トリ。
【雞のなくも久しくおぼされ】 心が急いでゐるので無用の雞の聲がながたらしきこえる。
【宵曉】 よひあかつき。
【行】 オコナヒ。朝夕の看經。
【安きいも大とのこもらず】 なかく面白語法である。

- 參 議 六十戸
- 正一位 二百廿五戸
- 從一位 百九十五戸
- 正二位 百五十戸
- 從二位 百廿八戸
- 正三位 九十八戸
- 從三位 七十五戸

【御莊】 ミサウ。『み』は敬語。『莊』は莊園のこと。王朝時代に勢力ある寺社又は個人の私有地にして莊號のあるものをいふ。『莊』とは田舎の家をいひ、『園』とはそれに附屬した苑をいふ。即ち田舎にある別莊のことである。思ふに昔は土地が唯一の財源となつたので人々が争うて土地の私有をはかつたのである。その起原は

- (1) 田莊——個人が開拓したもの又は御子代部・御名代部(記念として名を残す部落)が相傳するもの
- (2) 賜田——國家に功績あるものが勅旨によつて賜はるもの
- (3) 功田——大寶令により功績のあるものが賜はるもの

- (4) 開墾田
- (5) 勅旨田——勅旨によつて荒廢地を賜はるもの
- (6) 神寺田

これらの制度に反對するものは大化の改新であつたが、少しもその効果がなかつた。莊園には莊長を置いて管理させ、莊長は兵を養ひ、一般の私有地は莊園に繰入れてもらふことによつて免税をはかり、莊園の勢力は漸々に盛になつた。こゝに於て國司と莊官とのむつかしい交渉が起つた。歴代の勅旨は極力この大勢を變へて莊園の跋扈を抑へたが一切無効であつた。そこでやむなく公田に地子を課することゝなつた。私田もこれにならつて地子を課したが、それは國庫の收入とはならない。國庫増收の爲めに姑息の手段として賣官が行はれたのもこの故である。かゝる弊制は道長の時代に於て最も甚しく、後三條天皇の御改革にいくらか綱紀肅正に赴いたが御遺志が空しくなり、益々亂脈を極めて武家興隆の素因をつくつた。頼朝の時に至つて一切の土地は一旦朝廷に還つたけれども、例の守護・地頭の配置によつて、たゞ形式が變

つたのみで、その實は依然として莊園に異らなかつた。

(國史大辭典による)

【地子】 チシ。租税の一つである。昔は公田又は官田を一年間賣り又は永く貸して、その貸賃として納めさせるものをいふ。始め大寶令に定められ、後いろ／＼變遷し、醍醐帝の延喜年間に再び制度が確立したが、それも亂れ、頼朝の頃には全く不規則となつた。道長の時代は公田は減少した上に本文に見えるが如く遅納してゐたものであらう。

御封・御莊云々の方は私有地についていひ、
地子・官物云々の方は公田についていふ。

【官物】 クッンプツ
クッンモツ

- (1) 田租
- (2) 庸調

【おそなはる】 遅くなる。著者の地方には方言として用ふ。語の轉訛は恐らく

- (1) おそくなる

(2) おそなる (くを省く)

(3) おそな(は)る (はの混入)

【楡皮】 ヒハダ。楡の皮。屋根を葺くに用ふ。

【品々方々あたり／＼】 『御堂々々方々さま／＼』と同じ描法。

【同じくはこれこそめでたけれと見ゆ】 同じ工事の内にても佛像彫刻が一番結構のやうに見える。

【匠工】 タクミ。

【えさまさ】 かけごゑ。

【木賊】 トクサ。とくさを刈り鹽水につけて蔭乾にして、物をみがく。

【棕の葉】 棕(むく)の葉の乾いたもの、裏面にて物をみがく。

【數をつくしたり】 『つくす』は人數を集める點に手をつくすの意。

【おりたつ】 庭におりて立つ。馬からおりるときにも用ふ。

【力車】 チカラ車。

【大木】 オホ木。

【賀茂川】 さきにあげた略圖にて御堂が賀茂川に近いことを理解されたし。

【筏といふものに】 この『といふ』の詞はあまり周知されてゐない名や事柄を出す時に用ふ。周知されてゐないものに『といふ』の詞を附して表現する心理は誠に正直な心である。

【樽】 クレ。材木を切つて直ちに小工事に用ふるやうにしたもの。板は長くて幅も広いものであるが、樽は桶の周囲に用ふるほどのものをいふ。

樽は桶屋の棚にあり

といふ諺は人が物をくれとねだつたとき普通から文字つたものであるが、これにて大體樽の意味を知ることが出来る。

【西は東といふ】 賀茂川に筏の浮ぶさまを見て大津・梅津のやうだといふことは西を東といふが如き矛盾に等しい。

【率て】 率て。

【言盡し】 イヒツクし。

【須達長者の祇園精舎造りけん】 『スダッタ長者』はお釋迦

様時代の印度の富豪。『ギロンシャウジャ』は『祇園園林須達精舎』の略にて、祇園太子の園林を須達といふ富豪が買ひとつてお釋迦様の爲めに建立した精舎の意。精舎とは精進の道場。轉じて寺をいふ。

涅槃經二九に『そのとき須達長者が舍利弗に申すには「お坊さま、どこかこの舎衛城の外によい場所はありますか。あまり近くなく、又遠くなく、泉や池があり、立派な樹木があり、美しい果がなり、しかしして清淨閑雅なところは御座いませんか。私はそんなところに、お釋迦様にお弟子さまたちのお寺を建立させよう」と。舍利弗は答へて「それは祇園太子の園林が最も恰好の地であらう」と申されました』

【かくやありけんと思ゆるを】 この様にあつたでもあらうと思はれるけれども。

【冬の室、夏の風各ことくなり】 冬は温き部屋が必要であり、夏は涼しい風が必要であるやうに印度の祇園精舎は印度の國土に相應し、印度の工匠の設計により、日本

の法成寺は日本の國土に相應し、日本の工匠が設計したもので兩者とも各ちがつてゐる。『ことく』は異事・別事。

【かゝる勢】 法成寺建立のすさまじさ。

【入道させ給ひて後は、いと勝らせ給ふ】 道長は出家してから健康が大變すぐれた。

【なべてならさりける御有様】 立派な法成寺はできるし、健康は恢復するし、道長の幸運も並大抵ではなかつたのだ。

【そなたさまに赴けば】 人權極りなき道長の方に向へば。

【猶なべて】 『猶』にはあまり意味はないやうである。『まあ』といふ程の感動ならん。

【まづは】 その證據としてはまづ。

【御祈禱】 御祈り。

【何かかく殿の御事をばともかく申し給ふ】 その男は何か判つきりとはわからないが、かくく〜と道長のことをばともかくも申され。

【王城より東に佛法弘めん人を我と知れ】 『我と知れ』は『我

の生れがはりと知れ』の意。

【いづれにてもおろかならぬ御事なり】 弘法大師の再誕にしろ、聖徳太子の生れがはりにしろ、何れにしてもおろそかなことではない。

節意

第一節。始めから「深く御心にしませ給へり。」まで。

道長の法成寺建立に専心なる事。

いろく〜の事に、心を配り、指圖してゐるところがよく描かれてゐる。

第二節。「あたり〜につかうまつる。」まで。

道長の權勢にこびて、公の事を忽にしてまで、この法成寺の建立のためにつくす。

第三節。「各こと〜なり。」まで。

工事の模様を巨細に描寫する。

くはしいが、なんとなく繪物語などをみるやうな感じ。

第四節。終りまで。

道長の幸運。弘法大師・聖徳太子の再誕。

一六 世界の四聖

高山 樗牛

作者

高山樗牛 タカヤマ チヨギウ。文藝批評家。文學博士。名は林次郎。樗牛は其の號なり。明治二年山形縣鶴岡に生る。第二高等學校を経て、帝國大學文科大學哲學科に進み、二十九年卒業して、第二高等學校教授となる。後、職を辭して博文館に入り、雜誌『太陽』に文藝批評の筆をとり、文名一世に鳴る。三十年文部省より歐洲留學を命ぜられしが肺患にかゝりて果さず、病痾を湘南の濱に養ひつゝ筆を呵せり。其の思想の變遷を見るに、初め日本主義を唱道したりしが、後個人主義に傾き遂に美的生活本能主義を説き、ニイチエを紹介し、爲に是非の論一時に沸騰せり。晩年日蓮を研究し、特に其の人格を敬慕せり。三十五年に歿す。年三十四。駿河國田子浦の畔、龍華寺に葬る。墓に刻して曰く『吾人は須く現代を超越せざるべからず』と蓋し氏が理想を示すものなり。著書多く、みな樗牛全集に收む。

出所

樗牛全集、第三卷「文藝及史傳」にあり。明治三十四年十二月出版中學國語讀本卷七の爲に執筆せられたもの。

作意

二千年來古今東西の思想界、宗教界の根底をなし來し、今後も尙永遠に人類の救濟者として仰がれるであらうと思はれる世界の四聖の傳記とその教義との大要を知らしめんとするのが趣意である。しかも、徒に高遠に走らず通俗に流れずよく四聖の面目を傳へんとするところに作者の苦心がある。

解釋

【生まれて一代の宗師となり】宗師は尊崇すべ師匠。偉人。漢書朱浮傳に
 『博士之官爲天下宗師。使孔聖之言傳而不絶』
 蘇東坡の潮州韓文公廟碑の起首に『匹夫而爲百世師。一言而爲天下法。是皆有以參天地之化。關盛衰之運。』

【釋迦】 Sakya. 中印度なるオード(Oudh)の北境に住せる民種の名。もとは雪山の西北邊より北印度に入り、初は印度河畔の補陀落(Potala)に留り、後東に進みて中印度に達し、波羅奈斯(Varanasi)を距ること東北四十餘里恆河の支流、洛般賦河(Rohini) (今はラプチ河 Rapti) に流れ入る小流)の畔に定住し、こゝに伽毘羅國を建てたるならんといふ。

【參考書】 井上哲次郎 釋迦牟尼傳第四六頁。

【西曆紀元前凡そ六百年の頃】 釋迦の生年は諸説區々にして一定せず。西藏の傳にては遠く西曆前二千餘年とし、歐人の説にては近く西曆前五百年頃とするものあり。然れども多數の説は、西曆前五百五十年頃とするにあり。

【參考書】 藤井宜正、佛教小史、卷一、一八二頁。

【迦毘羅國】 中天竺にありし國。委しくは迦毘羅伐窣堵(Kapilavastu)。迦毘羅は黃、伐窣堵は城の義。恆河の支流洛般賦河(Rohini)の畔にありき。

【淨飯王】 ジャウボンワウ。或は白淨王・眞淨王とも漢譯

す。梵語には首圖駄那・輪頭檀(Suddhodana)と云ふ。摩竭陀國の刹利、師子頰王(Simhananu)の子。

佛本行經に『金國文字言。有。一刹利。世々輪王甘蔗苗裔相承。在。伽毘羅婆蘇都。名。輪頭檀王。一切世間天人之中。有。大名。種。尊者。堪。爲。彼王。作。子。菩薩言。善哉善哉。一生補處菩薩所託家。有。六十種功德具足。彼母三二種相相具足。菩薩依。之。爲。父母。』

【摩耶夫人】 マヤフニン。摩耶は梵語、具には摩訶摩耶(Mahayana Devi) 大術・大幻・大清淨・爲意等と譯す。釋氏の長者善覺に八女あり。淨飯王の妃となる。夫人はその第八女なり。又第一女とす。

華嚴經に『摩耶夫人答善財言。我已成就大願智幻法門。得。此法門。故。爲。盧舍那如來母。於。閻浮提伽毘羅城淨飯王宮。從。右脇。生。悉達太子。顯出不可思議自在神力。』

無量壽經に『設我得佛。國有。地獄餓鬼畜生。者。不。取。正覺。』
本行經に『太子誕生。適。滿七月。其母摩耶夫人遂使。命終。』

【參考書】 常盤大定、釋迦牟尼傳、二三頁。

【悉達多】 委しくは薩婆悉達(Sahasidhartha)譯して頗吉と云ふ。無量壽經私記に『太子生時。一切寶藏皆悉發出。所有諸瑞莫。非。吉祥。當。名。薩婆悉達。』

【佛陀】 Buddha 略して佛、訛して浮屠・浮圖等に作る。知者・智者又は覺者と譯す。一切諸法覺知せざる所なきをもつてなり。

智度論に『知。過去未來現世衆生。非衆生。數。有常。无常等。一切諸法。菩提樹下了々覺知。故名。佛陀。』

大藏法數に『佛。梵語。具云。佛陀。此云。覺。即自覺。覺他。覺行。圓滿也。』

【北天竺】 印度を五分して五天竺とす、即ち東・西・南・北・中天竺これなり。

【巡錫】 巡歴布教すること。錫は錫杖なり。錫杖は上は錫、中は木、下は牙或は角にて作る。塔婆形とす。これを見るは須彌法界塔婆を見るに同じ。故に一見する人、先、現世安樂にして後に淨刹に生じ、悉く佛を得といふ、これを突き鳴らして衆生を覺醒するなり。

【八十餘歲】 釋迦入滅の年壽も詳かならず、多くは八十歲とす。或は八十一歲とするものあり。

【跋提河】 バタイカ。委しくは阿特多伐底河(Ajiravati) 拘尸那揭羅城(Kusinagara)の外にあり。釋迦はこの河の西岸なる沙羅樹(樹に似て皮青白たり、葉に光澤ありといふ)の二本づつ雙べる林(沙羅雙樹)の中にて入滅せりといふ。

【幾多の哲學】 西洋紀元前八百年より六百年の間において、印度には諸流の哲學勃興す。聲論哲學・數論哲學・尼夜那哲學・勝論哲學等これなり。

【元々】 生民をいふ。民は國の元なればなり。史記の漢文帝紀の註に『善によりて元となす、故に黎元といふ。その元々といふものは一人に非ざればなり』

【歸命】 梵語。南無を譯して歸命といひ、又、頂禮、稽首などともいふ。教行信證に『南无之言。歸命。歸言至也。又歸說也(說字悅音)命言葉也。招引也。是以歸命者本願招喚之勅命也』

【木鐸】 政教を以て一世を指導することに喩ふ。論語の八

俗篇に「儀封人請見。……出曰。二三子何患於喪乎。天下之無道也久矣。天將以夫子爲木鐸。」註に「木鐸。金口木舌。施政教之時。所振以警衆者也。」

【二千一百餘年の昔】 史記の孔子世家に「以魯襄公二十二年庚戌之歲十一月庚子。生孔子於魯國昌平鄉陬邑。」

【魯國】 今の山東省の中にあり。魯國は周公旦の後裔これに侯たりき。

【壯年の頃】 史記の孔子世家に「孔子貧且賤。及長嘗爲季氏吏。料量平。嘗爲司職史。而畜蕃息。由是爲司空。而已去魯。斥乎齊。逐乎宋衛。困於陳蔡之間。於是反魯。」

【大司寇】 大司寇は司法裁判の長官なり。書經に「司寇掌邦禁。詰姦匿。刑暴民。」と見ゆ。史記の孔子世家に「其後定公以孔子爲中都宰。一年。四方皆則之。由中都宰爲司空。由司空爲大司寇。……定公十四年。孔子年五十六。由大司寇行攝相事。……於是誅魯大夫亂政者少正卯。與聞國政。三月。粥羔豚者弗飾賈。男女

行者別於塗。塗不拾遺。四方之客至乎邑者不以求有司。皆予之以歸。齊人聞而懼。……於是選齊國中女子好者八十人。皆衣文衣。而舞康樂。文馬三十駟。遣魯君。

陳女樂文馬於魯城南高門外。季恒子微服往觀再三。將受。乃語魯君爲周道游往觀。終日怠於政事。……桓子卒受齊女樂三日不聽政。郊又不致膳俎於大夫。孔子遂行寄乎屯。……孔子遂適衛。原文大司寇とあれどおだやかならねば大司寇と改めたり。

【齊侯】 齊の景公。名は杵臼。孔子魯を去り、齊に適くやこれに政を問へり。事は論語顔淵篇に見ゆ。

【參考】 史には「齊人云々」とあり。又史には、齊の君を齊侯といへり。原文、齊王とあるは改むべし。

【蕩然】 タウゼン。蕩は拂ふ。

【陵夷】 陵は丘なり、夷は平らかなり。丘陵の次第に低くなりて平地の如くなる義にて、事の漸く衰退するをいふ。漢書の成帝紀に「帝王之道日以陵夷。」

【狂瀾を既倒に翻さんとす】 大勢既にいかんともすべからざるに至りて、なほこれを挽回せんとするをいふ。

韓愈の進學解に「尋墜緒茫茫。獨旁搜而遠紹。障百川而東之。廻狂瀾於既倒。」

【名教】 聖人の教はそれ、名を立つ、五典五倫などの如し、故に名教といふ。晋書に「戎問曰。聖人貴名教。」

【蹉跎】 楚辭に「騷垂兩耳。中阪蹉跎。」註に「失足也。」張九齡の詩に「夙昔青雲志。蹉跎白髮年。」

【嗚呼吾が道遂に窮せり】 史記の孔子世家に「及西狩見麟曰。吾道窮矣。喟然歎曰。莫知我。子貢曰。何爲莫知子。子曰不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。不降其志。不辱其身。伯夷叔齊乎。謂柳下惠少連。降志辱身矣。謂虞仲夷逸。隱居放言。行中清。廢中權。我則異於是。無可無不可。子曰弗乎弗乎。君子病沒世而名不稱焉。吾道不行矣。吾何以自見於後世哉。乃因史記作春秋。……孔子曰。後世知丘者以春秋。而罪丘者亦以春秋。明歲。……孔子病。……卒。……年七十二。」

【下學して上達す】 人事を學ぶことが天理に達する所以である。論語、憲門篇に「子曰。莫知我也夫。子貢曰。何爲

莫知子。子曰。不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。」

【參考書】 蟹江義丸 孔子研究。

【ソクラテス】 Socrates(希 Sokrates, 獨 Sokrates, 德 Sokrates) 父は Sophroniscus と云ふ彫刻家であり、母は Plaenarete と云ふ産婆である。父の職業をつぐやうに教育されたが、前途有望の兆を示してゐた。生涯の大部はアテネに住み、市の無邪氣な若者を弟子として、その身の廻りに集めた。彼には一冊の著書がなく、學問の組織を發表せず、別に學派を創めなかつた。しかし彼の話を傾聴しようとするもの、爲には如何なる場所でも、雨が降つても日が照つても説話をした。そしてすつかり、正義と眞理との愛を鼓吹した。山師や虚偽者は不具戴天の仇敵であり、若し一人づつでも正義を考へ、正義を行ふやうに説き伏せることができるなら、如何なる怨恨を引き起さうとも、毫も意とするところではなかつた。クセノホン (Xenophon. 歴史家。ヘルシヤキルスの叛を助け

てバビロンに入りし時、ヘルシヤの政治状態を觀察して歸り以てアレキサンダー大王の遠征に資せり)の言によると、ソクラテスは大變に敬虔であつたから、神の納受なしには如何なる行爲もしなかつた。又、大變正義の心が強かつたからして如何なる人間にも如何なる程度にも不正を加へなかつた。又自分自身の心を自由に支配することができたので、善を捨て、樂しみに就くといふことはなかつた。又、大變賢明であつたから、より善きもの、より悪きもの、決定に於て決して、口ごもるといふやうなことはなかつた。要するに彼はこの世に存在する人の内で最も善良な最も幸福な人であつた」と。果して彼は怨恨を招き、彼の敵によつて死刑に處せられた。彼は國家の神を信ぜず、新しい神を導き入れ、青年を誤るものであると多くの判官に信じられ、遂に死刑の宣告を下されたのである。宣告から死刑まで三十日の間、友人との會話に靈魂の不滅を説き、脱獄の勧めには耳を藉さなかつた。そして鎮痛劑として用意されてあつた毒ニンジンを一服仰いで死んだ。(B. C. 469-390)

(以上ナトールの百科辭典から)

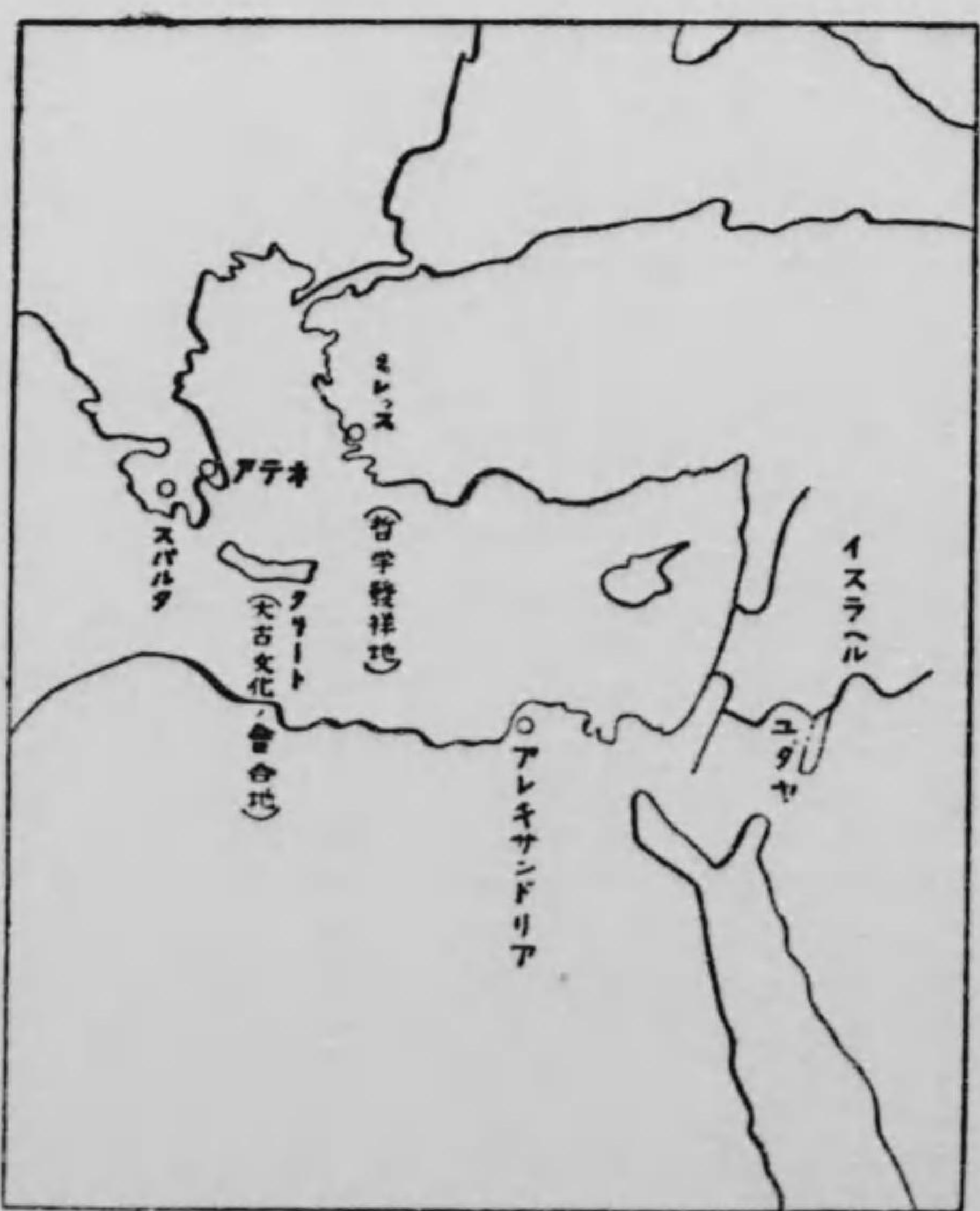
彼には著述がないので、後人の記述及び研究によらねばならぬ。その主なものはプラトン・クセノフォン・アリストテレスの三人の著述であるが、アリストテレスのものは自分の立場から批判したものであり、クセノフォンのものはソクラテスの言行にことよせて、自分の平凡な人生觀を宣傳したものであるから、何れもその真相からは遠ざかつてゐる。たゞプラトンはソクラテスに親炙し、共鳴し、忠實な弟子としてその師の事業を完成し、且つ藝術家の技能を以つてソクラテスの人物の特徴を描き出してゐる點などで唯一の信頼すべき資料を残してゐる。ソクラテスの教は知徳合一であつて、眞理と智慧が徳を導き出すものであるが、その知は單なる學問でなく確信といふことであり、徳即福といふ信仰の下に神の攝理まで達することができたのである。その爲めには自分の無知を自覺することが第一の急務であつて、無知の意識こそ徳に向ふ眞の道と考へた。それ故實際の指導に當つては所謂、問答法(Dialectic)を以つて相手を迷路に陥ら

せ、自家撞着に苦しみ、無知を自覺させることによつて、信と徳と福に悟入させたのである。彼の目的はソフィストのやうな知識の傳達ではなく、アテネの街を道徳的に改造しようとしたものである。

(以上岩波の哲學辭典から抄出)

【アテネ】ギリシヤは紀元前一五〇〇年頃にDorians, Ioniansの二民族が南下して所謂ギリシヤの發達をなしたのである。その民族は個性的であり、その土地は多くの山脈によつて分割された小平野であるので、所謂都市國家が發達した。その内ドーリヤ人を代表する南方のスパルタとイオニヤ人を代表する中部のアテネとは國情を異にした二つの對立として有名である。即ちスパルタは貴族的・武斷政治・陸軍國であるのに對し、アテネは民衆的・文化主義・海軍國であつた。アテネが興隆したのはペルシヤ戰役(B.C.四九二-四八〇)にテミстокレスが出でこの難關を切り抜けてからであり、戰捷の餘威とデロス同盟の金と商業の發展と之に加へるのにペリクレスの政治によつて空前の殷盛を極めた。かくの如き國家的發展

はやがて、哲學・科學・文學の振興を促したことは勿論であつて、小亞細亞の殖民地に發達した學問をギリシヤの街に巡回教授して歩いたソフィストの出たのはこの頃であり、アテネは比較的自由主義の街であつたので、他の



何れの街よりも多くのソフィストが入り込んだ。ソクラテスの出たときには不幸なるペロポネソス戰役があつて、ギリシヤ全體の衰微となり、アレキサンダー時代には一般文化の中心がアレキサンドリヤに移つたが、哲學

のみはアテネを中心としてゐた。

【詭辯學派】 Sophist. 紀元前五世紀の頃、ギリシヤ人に哲學・科學を教へて謝金をうけ、各地方を巡回して歩くことを職業としたものである。これらの學問は文化人としての教養の爲めであつたが、アテネは民衆政治であつたので、青雲の志を有する青年が政治界に雄飛する爲には群集の前にて雄辯な演説を試みて人氣喝采を博する必要が起り、ソフィストはこの要求に應じて修辭學・雄辯術を教授することゝなつた。その雄辯術は内容の充實、眞理の確實といふよりも形式的に論理をあやつり、どうでもかうでも相手を説伏させようといふ底のものであつたので、所謂詭辯なるものを生じた。Sophistの語原は知者の意味であつたのが、轉じて詭辯といふ意味になつたのは、ソクラテスの問答法の餘弊を惡んだプラトンに始まる。

【跋扈】 バツコ。わがまゝにふるまふ。上をおかす。

【諄々】 ジュンジュン。ねんごろなる貌。忠謹な貌。

【獨得の論法】 ソクラテスは常に對者を直接攻撃辯難する

ことなく、先づ巧に問を發して、對者をして之に答へしめ、之によりて其の有せる思想を分解し、虚偽の觀念を去り、且つ漸次正しき思想に導きて其の前説の非を自覺せしむる方法をとれり。

【假借】 カシヤク。

(1) かる

(2) ゆるす

【侃諤】 侃々諤々の約。侃々は剛直の貌。論語、鄉黨に「朝與下大夫言。侃々如也」

諤々は是非を直言すること。史記、商君列傳に「千人之諾々不_レ如_二一士之諤々_一」

【喬木は風に折らる】 高木風に嫉まるともいふ。人の眼をひく地位にあるものは、その嫉妬をひきやすきをいふ。文選の運命論に「木秀_二於林_一。風必摧_レ之。堆出_二於岸_一。流必湍_レ之。行高_二於人_一。衆必非_レ之」

張九齡の感遇詩に「美服患_二人指_一。高明逼_二神惡_一」和蘭の諺にも Tall trees catch much wind

【異教を舐め】 「舐」は「ハジメ」と訓み、創に通ず。

【傲岸不遜】 「傲岸」は崖岸の如くかど／＼しく傲慢なること。李白の句に「崖生何傲岸」。「不遜」は不順にして謙恭な

らざること。論語、述而に「與其不遜_二也_一。寧固」

【アスケレピオス】 Asclepius 古代希臘の神仙傳中の一神。醫藥一切を司る。よく死人を生かし、死して天に昇れりといひ傳ふ。繪畫・彫像の傳ふる處にては美髯ある老人なり。

【耶蘇】 イエス。 Jesus. これは固有名詞なるが、猶太人の間にはありふれたる名稱にて、ヨシヤ (Joshua) と類音同義なり。されどこの語の原義にも「救世主」の義ありともいふ。

【基督】 キリスト。 Christ. 元來は普通名詞にして「膏を灌がれたる者」の義。教徒の奉りたる尊稱にて、父母のつけたる名にあらず。受膏灌油の式は昔より王者・祭官を聖にする所以にして、豫言者も亦これによりて、特殊の天職を授かるなり。救世主は三箇の尊威を有す。彼は天啓を傳ふるにおいて豫言者、裁き且統ぶるに於て王者、

又自己を犠牲に供ふるに於て祭官なり。されば、使徒等、イエスを崇めてキリストといひしなり。

【ベツレヘム】 Bethlehem. ベツレヘムともいふ。小亞細亞のパレスチナの一市にて耶蘇の降生地。エルサレムの西南五哩半にあり。第四世紀の頃女帝ヘレナの建築にかかる大殿堂あり。その周圍にも無數の堂塔ありて、聖地を尊嚴ならしむ。

【西曆紀元元年】 西曆紀元はもと耶蘇誕生の年を第一年に數へたるなれど、後世史家の考證によりて、その違算あるを發見せるなり。

【ヨセフ】 Joseph. マリヤの夫。イエスの父。

【マリヤ】 Maria. ヨセフがいひなづけの處女。

【豫言者ヨハネ】 Johannes. 英の John. 耶蘇の前驅者にして、ヘブライの有名なる宣教師。父はザカリヤ。母は耶蘇の母マリヤの従女たるエリザベタ。年三十、布教を始め、ヨルダン河水を以て、世人に洗禮を施し、これを受くるもの無數。ナザレにて耶蘇に逢ひ天より聲あり、耶蘇の威光と名とを授けられたり。即ち耶蘇はヨハネの洗

禮を受けその説教によりて感化せられたるが如し。のちヨハネはユダヤ王ヘロドの命により、斬首せらる。

【洗禮】 始めて耶蘇教に加入する者に施行する儀式にして、この儀式は宗派毎に多少の相違あれど、要するに水を以て、罪惡を洗滌するの意を含むものなり。この洗禮を受けたるものは、以前にいかなる行ひありとも、その行ひをなしたる人とは全く別なる人となりたりとするなり。即ち新人となるなり。儀式の大體をいはんに、こゝに洗禮を受けんとする人即ち受洗者と、洗禮を施すべき會者即ち牧師・宣教師・僧正等とあり。會者は嚴格なる態度を以て、神聖にせられたる水を受洗者に注ぎ、もしくは水を形ばかり體に觸れしめ「父と子と、聖靈の御名によりて云々」と唱へ、これにて洗禮を終ふ。洗禮終れば、受洗者はもはや基督の弟子、神の子として、教會員の一人たり。

【福音】 フクイン。英語 Gospel よろこばしき消息。別してユダヤ人が待てるメシアがキリストの人格にあらはれたる喜ばしき消息。

【當時羅馬帝國は榮華其の極に達し】 所謂オクタヴィヤヌス (Octavianus) の時代をいふ。羅馬は紀元前一三三年にチベリウス、グラックス (Tiberius Gracchus) が護民官となつて、中等獨立農民の保全を圖つてから市民權の問題・貴族平民の争・兵權の争奪加ふるに屬州政治の紛糾・外敵の侵入等幾多の内憂外患に苦んでゐた。幸にケイザー (Julius Caesar) といふ一大偉人が出て、ローマの難局を救はうとしたが、不幸にして凶刃に斃れて意志が空しくなつた。然るにケイザーの養子オクタヴィヤヌスは養父の志を繼いで、第二回三頭政治 (紀元前四三) を形成し、次いでアントニウス (Antonius) をアクチウム (Actium) に破つて天下を一統した。この時既に多年の戦争は羅馬の産業を妨げ市民をして生活難に陥らしめてゐたので、一日も早く偉大な人物が出て平和の生活が營められることを望んでゐたので、天下を統一したオクタヴィヤヌスの人望はすばらしいものであつた。けれども賢明な彼はローマの共和制を重じ、元老院を尊重し、その實は元老院は彼の傀儡にすぎず、背後には有力な親兵を養ひ、

あらゆる官職を一身に兼ねて殷然たる皇帝の實をあげた。彼の内政は一方に巨額の資本を投じて、都市生活の改善を圖り、一方には文學を奨励したので、Virgil, Horatius, Ovidius などの詩人が出て皇帝を讃歌し、ラテン文學の黄金時代を出現した。かくてローマの隆盛はこの時を頂點とする。

【禍亂の萌芽其の中に胚胎し】 オクタヴィヤヌスは紀元一四年に歿しその子のティベリウスが位についたが、その時既に親兵の跋扈はあつて、Sejanus といふ親兵の長が新皇帝を排斥しようとしたことがある。親兵の跋扈はローマにとつて病菌のやうなものであつたが、遂にローマは紀元四七六年オドアカル (Odacer) の爲め亡されたのである。又、中等獨立農民は段々疲弊して行くのに、徹底的な救濟法が講じられてゐないので、段々と兵力が弱くなり、貴族は兵役を忌避するといふわけであるのに、蠻賊に對する政策も一定しないので、流石のローマも滅亡の悲運がくるのである。

【胚胎】 きざすこと。『胚』は集韻に「婦孕一月也」『胎』は説

文に「婦孕三月也」増韻に「凡孕而未生者皆曰胎」爾雅釋詁の「胎始也」の註に「胚胎未成。亦物之始也」

【荐に】 シキリに。小爾雅に「重也」左傳僖公十三年に「晉荐饑」

【收斂】 重税を課すること。『收』も『斂』も共に聚め取る意なり。

大學に「百乘之家不畜收斂之民」

【淫祠】 祭るべからざるみだらなる神祠。唐書、狄仁傑傳に「持節江南。毀吳楚淫祠千七百所。止留夏禹・吳太伯・季札・伍員四祠」

【磔殺】 タクサツ。

【晏然】 『晏』は安なり。

【神よ彼らを許せ、彼らは其の爲すべき所を知らざればなり】 新約全書路加傳福音書第二十三章三十四節に「イエス曰ひけるは「父よ。彼等を赦したまへ、そのなす所を知らざるが故なり」彼等圖をしてイエスの衣服を分つ」

Then said Jesus, Father, forgive them; for they know not what they do, And they parted his rai-

ment, and cast lots.

【エルサレムの女子よ、わがために哭くなかれ】 同上二十
三章二十八節に『イエス彼等を顧みていひけるは、エル
サレムの女子よ、わが爲に哭くなかれ。唯己とわが子と
の爲に哭け』

But Jesus turning unto them said, Daughters of
Jerusalem, weep not for me, but weep for yourselves,
and for your children.

○ 【懣軻】 不遇なること。

廣韻に「懣軻不遇也。車行不利曰懣軻。故人不_レ得_レ志亦
謂_ニ之懣軻_一」また坎珂・輻軻などに作る。

【釘殺】 テイサツ。十字架の上に釘づけにして殺す。

【煩惱】 ボンナウ。三〇〇頁参照。

【涅槃】 ネハン 三五九頁参照。

【身を修め】 大學に「古之欲_レ明_ニ明德於天下_一者。先治_ニ其
國_一。欲_レ治_ニ其國_一者。先齊_ニ其家_一。欲_レ齊_ニ其家_一者。先修_ニ其
身_一。欲_レ修_ニ其身_一者。先正_ニ其心_一。欲_レ正_ニ其心_一者。先誠_ニ其

意。欲_ニ誠_ニ其意_一者。先致_ニ其知_一。致_ニ知_ニ在_ニ格_ニ物_一」

【孝は百行の本なり】 論語の學而篇に「君子務_ニ本_一。本立而道
生。孝弟也者。其爲_ニ仁之本與_一」
古文孝經の序に「孝_ニ百行之本_一」

【君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信】

孟子の滕文公上に「人之有道也。飽食煖衣。逸居而無_レ教。則近_ニ
於禽獸_一。聖人有_レ憂_レ之。使_ニ契_ニ爲_ニ司徒_一。以_ニ人倫_一。父子有_レ親。君
臣有_レ義。夫婦有_レ別。長幼有_レ序。朋友有_レ信」

【人は生れながらにして】 論語の陽貨篇に「子曰、性相近。習
相遠也」

【山上の垂訓】 新約全書の馬太傳五、六、七にいづ。山は
猶太のガラリヤ州にあり、祝福の山と稱せらる。ゲネサ
レ平原の南端マダラの近傍にある小山にて、今テルハ
ッチンと呼ばれる、ものこれなりといふ。耶蘇、道を求む
る數多の人々に向ひて、この山上にて教訓を垂れしな
り。

【心の貧しき者……神を見るべければなり】 馬太傳第五章
第三節より第八節に至る十福を説かれたる中の句なり。

心の貧しきものとは自家の心靈の貧賤なるを自覺せる人
の意。

3 Blessed are the poor in spirit: for theirs is the
kingdom of heaven.

4 Blessed are they that mourn: for they shall be
comforted.

5 Bless'd are the meek: for they shall inherit the
earth.

6 Blessed are they which do hunger and thirst
after righteousness: for they shall be filled.

7 Blessed are the merciful: for they shall obtain
mercy.

8 Blessed are the pure in heart: for they shall see
God.

【悲しむ者】 現在の不完全に満足せずして、永遠の眞理を
追ひ求めて悲しみ悶ゆるもの。

【憐を得べければなり】 人を憐み恵む者にして、始て神の
憐を受くるを得。

【惡に敵するなかれ】 馬太傳五にかゝげたる五箇條の憲法

の中の第四條なり。「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと
スへることあるは、爾曹が聞きし所なり。されどわれ爾
曹に告げん、惡に敵することなかれ。……」

38 Ye have heard that it hath been said, An eye
for an eye, and a tooth for a tooth:

39 But I say unto you, That ye resist not evil:
but whoever shall smite thee on thy right cheek,
turn to him the other also.

イスラエル立法者の復讐主義は未だし、斷然惡に敵せざ
る主義をとれ、その意は愛と善とを以て惡者を撲滅せん
とするなり。

【汝の隣人を慈しみて】 馬太傳五にかゝげたる憲法五箇條
の中の第五條なり。「爾の隣人を愛しみてその敵を憐む
べしといへることあるは爾曹が聞きし所なり。されど我
爾曹に告げん、爾曹の敵を愛し、爾曹を詛ふ者を祝
し、爾曹を憎む者を善くし、虐遇迫害者のために祈禱せ
よ。かくするは天に在す爾曹の父の子とならんためなり。

夫れ天の父はその目を善きものにも悪しきものにも照らし、雨をたゞしきものにもたゞしからざるものにも降らせたまへり。爾曹おのれを愛するものを愛するは何の報賞かあらん。……」

43 Ye have heard that it hath been said, Thou shalt love thy neighbour, and hate thine enemy.

44 But I say unto you, Love your enemies, bless them that curse you, do good to them that hate you, and pray for them which despitefully use you, and persecute you :

【人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ……神はあらはに報い給ふべければなり】 馬太傳六の始めに

1 Take heed that ye do not your alms before men, to be seen of them : otherwise ye have no reward of your Father which is in heaven.

(汝のなす施をば人々に知らしめんがためそのまへを選んでなすことなきやう注意すべし。さもなくば天にゐます父からの酬

は一つも得られぬこと)

2 Therefore when thou doest thine alms, do not sound a trumpet before thee, as the hypocrites do in the synagogues and in the streets, that they may have glory of men. Verily I say unto you, They have their reward.

(かゝるが故に汝が汝の施をなす時、汝の前にて喇叭を吹くこと勿れ、宛も偽善者が人々の讚歎をうけんが爲めに、教會や街路に於てなすが如く。誠吾れ汝に告ぐ、彼等偽善者はその報を得たる)

3 But when thou doest alms, let not thy left hand know what thy right hand doeth.

(おれば汝施をなすときは汝の左手をして汝の右手のなすことを知らしむ勿れ)

4 That thine alms may be in secret: and thy Father which seeth in secret himself shall reward thee openly.

(それは汝の施をして秘密ならしめんが爲なり。されども父は隠れたるに鑒給うてあらはに報い給ふべし)

【人は神と財とに兼ね事ふること能はず】 馬太傳六に

24 No man can serve two masters : for either he will hate the one, and love the other ; or else he will hold to the one, and despise the other. Ye can not serve God and mammon.

(如何なる人間も二人の主に事ふること能はず。そは此を惡み彼を愛しみ、此を親しみ彼を疏むべければなり。汝は神と財とに兼ね事ふること能はず)

【人を是非するなかれ】 馬太傳七の始めに

1 Judge not, that ye be not judged.

【人の目にある塵を見ながら何ぞ己が目にある梁木を見ざる】 馬太傳七に

3 And why beholdest thou the mote that is in thy brother's eye, but considerest not the beam that is in thine own eye?

【汝等求めよ。然らば與へられん云々】 馬太傳七に

7 Ask, and it shall be given you; seek, and ye shall find; knock, and it shall be opened unto you :

【窄き門より入れ、沈淪に至る門は濶く、其の路は大きく、

これに入る者は多し】 馬太傳七に

13 Enter ye in at the strait gate : for wide is the gate, and broad is the way, that leadeth (leads) to destruction. and many there be which go in therat:

【嗚呼、いかに、生命に至る門は窄く、其の路は細く、これを得る者の少なきぞや】 馬太傳七に

14 Because strait is the gate, and narrow is the way, which leadeth unto life, and few there be that find.

【凡そこの訓を聞いて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く】 馬太傳七に

24 Therefore whosoever heareth these sayings of mine, and doeth them, I will liken him unto a wise man, which built his house upon a rock ;

【聞けども行はざる者は砂上に屋を架せる愚人の如し】 馬太傳七に

26 And every one that heareth these sayings of

nine and doeth them not, shall be likened unto a foolish man, which built his house upon the sand.

【譯々】リン／＼。(1) 寒さの身にしむ貌 (2) 勇氣の盛な貌。こゝは基督教義が嚴にして威あるをいふ。

節意

第一節。始めから「……世界の四聖と稱す、宜なるかな。」まで。

序説。世界の四聖の名を列挙する。

第二節。「……歸依する所を知らしめたり。」まで。

釋迦の傳記。

第三節。「……時に年七十三。」まで。

孔子の傳記。

第四節。「……年七十。」まで。

ソクラテスの傳記。

第五節。「……基督教即ち是なり。」まで。

基督の傳記。

第六節。「……無邊なるや。」まで。

以上四聖人の人物・事蹟の比較評論。

第七節。「……即ち涅槃なり。」まで。

釋迦の教理。

第八節。「……終る者と見るを得べし。」まで。

孔子の教。

第九節。「……富貴は道德の中に在り。」まで。

ソクラテスの教。

第十節。「……山上の垂訓に基す。」まで。

基督の教。

第十一節。終りまで。總括。

以上を分つて、二つとなし、前は四聖の傳記、後はその教理の説明と見ることが出来る。

挿圖解説

吳道子筆、釋迦。

吳道子は唐の畫家。吳道玄、又吳生とも呼ばれる。陽翟の人で、東洋に於ける畫聖である。年少洛陽に遊んで一旦書を學んだが、志を翻して畫道に入り、遂に入神の技に達した。兗州瑕丘の尉となるに及んで明皇に召出され、名を道玄と改め、名聲天下に震うた。

一七クリトン

久保 勉

作者

久保勉 クボ ツトム。東北帝國大學教授。哲學者。東京帝國大學の哲學科を終へてから、永く恩師ケーベル博士の傍にあつて、種々の世話をした。著書には「ケーベル博士小品集」(深田康算博士と共譯)「續ケーベル博士小品集」「續々ケーベル博士小品集」等がある。

プラトン (Platon, Plato. B. C. 429-347)

希臘の大哲學者、アテネの貴族の家に生る。幼にして善良なる教育を受け、體操に秀で詩文に巧なり。二十歳ソクラテスの門に入り學ぶこと八年。ソクラテスの歿後メガラに移りオイクライデースの門に遊び、又ピタゴラスの數學を學べり。後政治に志せしも、其抱負を實行するを得ず、紀元前三八七年頃よりアテネの近傍アカデミーに學校を開き死に至る迄研究と育英とに従事せり。

プラトンの文は雄渾にして光彩あり、ギリシヤ哲學中の

絶品と稱せらる。其著はいづれも對話付にして、ソクラテスと他の二三の人々との對話に擬し、其問答・辯難の間に漸く眞理を闡明し行く結構なり。内容を離れ、これを純文學的作品と見ても十分の價值あるものと認めらる。題號は多く篇中の人物の名を用ひ、或は篇中に論述せらるゝ事件によりて名けしもあり。今日に傳はるもの總計三十六篇、中には疑はしきものも少からず。プラトンの作として少しも疑なきは十五六篇に過ぎず、其他は竄入・改作若しくは偽作の痕あり。著作の時期によりて分てば、其初期は専らソクラテスの人物と主話とを明かにして、其刑死の不當なりしことを明かにせん爲に書かれしものにして「辯明(アポロギア)」「クリトン」の二篇は此期に屬す。「ファイドン」はソクラテスの最期の狀を記しあれど第三期の作と見るを穩當とす。第二期は詭辯派の説を駁撃するを主とせる作にして「プロタゴラス」「ゴルギアス」等此期に屬す。第三期のものは即ち彼が自家

の哲學説を十分に發表せる諸作にして「國家篇」「饗宴篇」「フアイドロス」「テアイテトス」「チマイオス」等其主なるものなり。「國家篇」は中にも最も整頓せる長篇にして、これによりて彼の學説を略々悉し得べし。末期の作は稍々厭世的に傾き光彩を失へり。「法律篇」は此期に屬す。文章のみに就いていへば「饗宴篇」と「プロタゴラス」とを傑作とすべし。

出所

プラトン對話篇 1 ソクラテスの辯明及クリトロン 久保 勉・阿部次郎共譯 岩波書店發行。

のクリトロン(一名、市民の義務)全篇十七章よりなつてゐる内初めの七章だけ取つた。

略された部分も續いて牢獄内に於けるソクラテスとそれを救はんが爲に來たクリトロンとの會話である。ソクラテスは國法に絶対に服従すべきものである事を種々なる例證と彼一流の問答法とによつて論じ、親友クリトロンに切なる勸告をもしりぞけて自らの信念の聲に従つて靜かに死を待たうとする悲壯な心境が書かれてゐる。

ソクラテス「愛する友クリトロンよ、信じたまへ、僕はかう云ふ聲を耳に聴くやうに思ふのだ。丁度コリュバンテスの騒ぎに酔された人々は、笛の音の耳に残ることを覺えるやうに。さうして此等の言葉の反響が僕に残つてゐて、僕を他の音が聴えない者にする。だから信じたまへ、少くとも僕が現在信ずるところでは假令君がどんなに抗辯してもそれは空語に歸することを併し若し君が、まだ何かすべきことがあると信するならば、言つてくれ給へ。」

クリトロン「否、ソクラテス、僕はもう何も言ふことがない。ソクラテス、クリトロンよ、ちやあそれでいい。僕はさう行動しよう。神がそちらに導いて下さるのだから。」

原著にソクラテスの精神とプラトンの創作態度についての註釋が書いてあるから引用する。

「プラトンの數ある對話篇は、たゞ一つを除けば、總てソクラテスを其中の人物の一人、而も大抵主人公としてゐるが、其等の中に於ても、本卷に収められたる『ソクラテスの辯明』とその續篇とも稱すべき『クリトロン』とは、次に譯出せんとする『フアイドン』と共に、この世界史上西僑なき人格の、人類の永遠の教師の生活に於ける最も意義深き、最も光輝ある最後の幕を描いたものである。『辯明』に於て、プラトンは、その崇敬せる師が、不正にも、神々を信ぜず且つアテネの青年を腐敗せしめたとの罪名の下に死刑を宣告されたが其實彼は深く宗教的な人であり又青年を向上せしめたことを示すと共に、彼が法廷に於て如何なる精神を以て又如何なる調子を以て自ら辯明したかを描い

た。かくして彼は彼の時代と後世とに對してソクラテスを辯護したのである。『クリトロン』は死刑の宣告があつた後、獄中に於てソクラテスとその忠信なる友人クリトロンとの間に交はされた對話から成つてゐる。さうしてこの篇は不正なる死の宣告を受けたに拘らず、猶喜んで死に至るまで國法を遵守せんとする忠良なる公民としてのソクラテスの性格の一面を描出したものである。この二篇は藝術的に見ても、殆ど完璧に近いと言はれよう。

プラトンは裁判の當時傍聽席に在つたに拘らず、その『ソクラテスの辯明』が必しも詞通りの忠實なる報告でないことは想像に難くない。詩人としてのプラトンは恰も眞の畫家が肖像を描く時の如く、必や藝術家的見地よりして事實の上に可成り自由なる取捨を施す必要を感じたであらう。而もこの取捨たる、決して事の本質を、眞精神を牽強附會するが如きものではなく、寧ろ字句以上の眞實と、『永遠の見知から見たる』眞實を一層明確に發揮する爲であつたに相違ない、而もまた彼は見事に之に成功したのである。(中略)

さればこの一篇に於て眞實と作爲との間に明確なる區劃を立てることの不可能なるは言ふ迄もないと言へ、大體に於て全篇の藝術的構成はプラトロンに歸せらるべきものと見ると同時に、その内容は最も深い意味に於て、ソクラテスその人のものと做すも恐らく大過無いであらう。この篇の隨處に照り輝ける偉大なる魂と無二の強大なる意志と自由なる精神とは、プラトロンよりも寧ろソクラテスの特徴であつた。(中略)

判決の下つた後ソクラテスは、偶然の事情のために尙三十日の間獄中に生き延びることを得た。この期間に於て彼は容易に逃走を企て得たのである。彼の忠實なる友クリトロンに如きは熱心に之が決行を勸説したのであつた。それにも拘らず、ソクラテスは友の忠言に従はなかつた。その理由は弟子達にも解し難きところであつた。然るに彼にとつてそれは自由の事であつた。彼は唯彼の常に爲し來つたところを爲したに過ぎぬ。彼は理性の正しとして命ずる所に従つた途である。その結果は死であつた。而も彼は平然としてこれを受取つた。蓋し生きると死ぬとは彼にはそれ程重大な事ではなかつたからである。重大なるは正しく行動することであつた。——而も彼は生に於ても死に於てもこれを能くした。この間の消息を明にするものは彼の死後間もなく『辯明』に次いで書かれたであらうと推定される小對話篇『クリトロン』である。如何に彼が小心翼翼として國法を遵守する義務に忠實なる公民であつたかを示すこの一篇は、儘にソクラテスの眞精神を傳へたものであらう、その形式は(恐らく國法の擬人的取扱の如きも)プラトロンに歸すべきであるけれども。さればそれは哲學上の興味や理解を缺ける善良なる一般國民に對して、特に適切にソクラテスを辯護し得たに違ひない。かくの如くにして自己の信念の爲に生きたるソクラテスは亦自己の信念の爲に斃れたのである。人間の自由と理性の自律とを説く彼の教が能く弟子達の信する所となつたのは、彼が單にそれを口にした許でなく、それが彼の衷に生きてゐたからであり、彼が實行を以てその眞實を證したからである。而もこれ雖て彼

がその信念の爲に死ななければならなかつた所以である。思ふに斯くの如き告發とかくの如き死となくしては、彼の本質の奥底とその世界觀乃至人生觀とは決してかくまで、明かにかくまで鮮かに發揮されしなかつたであらう。さればこれ實に彼の魂の偉大と自由とを示すに最も恰好なる機會を與へたものと謂ふべきである。蓋し偉大なる魂は偉大なる事件に際會して始めて充分にその偉大を發露するが故である。我等が彼の死を以て彼の事業の冠冕となす所以も亦此處にある。

作意

七十年の生涯を、人の心を理性に目醒めして、同胞を有徳、幸福なる生活に入らしめんが爲に捧げつくしたソクラテスは不當の裁判の犠牲として死刑を宣告されたが、理性的に正しく行動する事を唯一の信念とする彼にとつては死も生も問題ではなかつた。逃走をすゝめる親友の切なる勸言に對しても平然として自己の信條を堂々と吐露して、頑として動ぜず死を背後にひかへなから、むしろその友に、かゝる行爲の誤れるを説得する大哲人の眞實に對する悲壯崇高なる覺悟を表はした文章。

解釋

【ソクラテス】 (Socrates: B. C. 469—399)

よりに起るものと信ぜられたり。風雨・雷電・雪露・雹霰の類、一として此神の起すところならざるなし。其他天然界、人間界の調和は、此神の掌るところなり。即ち四季の循環・晝夜の別の如き、又人間界の主權並に法律・社會の秩序の如き是なり。個人の家庭を組織するも此神の力による。故に各家此神の供物臺を備へあり。又託宣の力あり。ゼウスの最も古き崇拜地はエピロスの下、ナナリしが後エリスのオリンピアの神殿最も有名となれり。

【不問】 プマ。きのきかぬ。まぬけた事。

【デロス】 テセウスが勝利を得て無事にクレテ島から歸つて來たについて感謝の意を表する爲に、アテネ人は毎年デロスへ船を送つてアポロン神に供物を獻じてゐた。この聖船が出帆の迫れる合圖に祝の桂冠を戴かしめられてからその歸港する迄の間アテネに於ては全然死刑の執行が許されなかつた。然るに偶然ソクラテスの裁判が行はれた前の日にその船は桂冠を以て飾られ、三十日の後に漸く歸著したのである。(「ファイドン」第一章参照)

希臘の哲學者、父は彫刻師にして母は産婆なり。雅典に生れ前後三回ペロポネサス戦争に従事して勇名あり。當時の希臘は舊信仰破れて新信仰未だ確立せず、ソフィストの徒勢力を逞うして、世道衰へしかば、ソクラテス奮然として此間に立ち、道德の改善と眞理の普及の爲に畢生の力を注げり。されど其の説守舊派の容るゝ所とならず、(一)國教を信ぜず、(二)異端の説をなし、(三)青年を腐敗せしめたりとの理由の下に死刑の宣告を受け、從容毒を仰いで逝く。尙くはしくは大日本百科大辭典について參看せられたし。

【クリトン】 (Crito) ソクラテスと閨を同うし、その幼少の時以來の親友であつた。彼は哲學的素質よりも、寧ろ實際的才幹を具へた人であつた。

【心附】 コ、ロヅケ。氣をつけて贈與する金品。

【ゼウスにかけし】 Zeus(G)・Apollon(T)神を引きて誓ふ。神に誓を立つ。

ゼウス。古代ギリシヤ人の崇拜せし至上神。天の神にして、萬物の創造者たり。特に天界の諸現象は此神の力に

【お前は幸饒きフテアに着くであらう】 怒れるアヒレウスはこの詞(イリアス第九書三六三行)を以てアガメムノンの使者に、希臘軍(トロイ戦争)を去つてテッサリアに於ける故郷フテアへ歸らんとする彼の決心を言明してゐる。ソクラテスは正に彼岸に於て彼の本來の故郷を見出さうと期待したのである。

【今でも構はないから僕の云ふ事を聽いて逃出してくれ】

さればこの會談は、クリトン若しくは其他の者がソクラテスに脱獄を勸告したる最初ではなかつた譯である。猶それは本篇第九章に就いて一層明かになつてゐる。

【幫助】 ホウヂョ。たすける。幫は幫也、補助也。

【怯懦】 ケフダ。臆病。

【理性的思考】 リセイテキシカウ。

理性とは一、最も普通には感性知覺の能力としての感性に對して概念的思惟の能力を指す。人間をば禽獸と區別して理性的生類といふ如きは其例である。二、此用法を更に實踐上に適用して、本能、衝動、又は感性的欲求に依て動かされたる行動に對して當爲の意識に依て決定せ

られたる行動を理性的行動といひ、其の能力を理性といふ。故に理性的思考とは當爲の意識によつて行動を決定する爲の思考を云ふ。

【衝動】 ショウドウ。先天的若くは後天的に獲得した身體的若くは精神的傾向が意識的強迫的に吾人の動作を促すとき吾人は衝動を感じるといふ。

一八學の話

得能文

作者

得能文 トクノワ アン。哲學者。文學博士。慶應二年八月富山縣に生る。明治二十四年、東京帝國大學文科大學選科を修業し、第四高等學校、日本、豊山各大學、東京高等工業學校、東京帝國大學文科大學各講師、淨土宗専門學院教員、東洋大學教授を歴任し、大正十年文學博士の稱號を受け、十一年東京高等師範學校教授に任ぜられ現時其職にあり。

出所

浅人零語 昭和三年 第一書房發行 第六部 學の話 教科書本文との異同は 一六四頁八行、「かくして眞實なるものを」の次に「欣求し、智慧を欣慕することによつて學が生じて來るのである。本當のもの、眞實なものを欣求するは……と続く。一七〇頁一行、「それ／＼の特殊科學」の次に「となつて

來る。斯くて數學・物理學・化學・生物學等となつて分かれて來るのである。特殊科學は此の如く種々に……と続く。

全頁二行、「此の學たること (Wissenschaftlichkeit) は經驗的事實ではなくして……となつてゐる。

浅人零語について作者は序文に次の如くのべてゐる。「明治の中期から大正の終り頃に至るまで、折りにふれ事に臨みてものせし隨筆・小品・雜記を集めて、この一卷をなす。従つて文體・筆致は甚しく異なるものあるは亦止むを得ない。中には全然削除してしまひ度く思ふものもあれど、雞肋の情捨て難くて、そのまゝとした。

いま舊稿を纂するにあたり、文の趣向または形態の相近きをもつてそれ／＼一群となし、かりに編次を定めた。而して各群に於ける文の先後はすべて年代のそれに依ることにした。中略、頭を回らせば茫々三十年。文、人と共に老ゆ。想へばうたゝ生前に遺稿を編むの感なきを得

ない。」

序文にある様に本文は類似の作品群により六つに分たれ

第一部 茶を論じ、蕎麥を論じ、孤寂を論じ、ケーベル先生をのべ純粹の隨筆風のもの

第二部 芭蕉に初まり俳句・詩・劇等に關するもの

第三部 時事問題に關するもの

第四部 古來の哲人の生涯に關するもの

第五部 哲學上の問題に關するもの

第六部 日常生活の諸般事に關するもの

其の多方面にわたり、多趣味な事と其の觀察・思索の犀利深遠なる津々たる妙味をもつた好隨筆集たるをうたがはぬ。

其の淺人零語なる題目について作者は次の如くのべて自ら謙遜して居られる。

「悔恨から罪の意識が起る。併し深く自らに沈潜せざる時は此意識は起らない、従つて淺人には罪の意識は無い。従つて自ら辯護せんと試みる、是に於て語が多い。やがては不幸を訴へる、予程不幸なもの無いとも言ふ。眞

實に切實に不幸を感じるのは深く自ら省みた時である。即ち深き奥底が動いて居るのである、動いて居る時は語は無い。痛切なる深き悲哀も大歡喜の法悦も共に語は無い。而かも大地は震動する。」

作意

わかた様で實際はよくわからず、又屢々あやまられて自他共に解しやすい「學」と云ふものゝ本質を考察し、それが單なる物識りでもなく、又亂讀でもなく、眞正の求知性に依る事を明かにし、學の尊嚴性と無限性を述べそれにたづさはる學人の態度を教へた文章である。

淡々として平易な文章。内にさすがに一生を學に奉仕された著者の高い人格が所々に浸み出て深い内省と教示とを與へる。言々味ふべき文章である。

前課に於ける學人の典型としてのソクラテスの態度と關聯し現時の世道人心の頹廢に對して深く反省すべき根本精神として有意義に取扱はれん事を希望する。

解釋

【五井蘭洲】 ゴキランシウ。大阪の儒者なり、名は純禎字

は子祥、蘭洲は其の號又洲菴と號す、通稱藤九郎、持軒の

二男、家學を嗣で世に名あり、享保中中井登菴懷德書院を大阪尼ヶ崎方に設く、三宅石菴講席を主どり、蘭洲助教

となる幾くもなく江戸に來る。遂に召されて津輕侯に仕

ふ、津輕は本邦の北阪なり、民俗甚だ陋野文學の何物たるを知る者少し。蘭洲赴くに及びて始めて學に嚮ふを知

ると云ふ。既にして言或は行はれざるを以て乃ち病と稱して致仕し元文四年大阪に歸りて復懷德書院に教授し以

て其身を終ふ。津輕を辭するの後、遠近争ひ召せども皆應ぜず。其學程未を以て依歸とす、然れども固執せず此の

時に當りて復その學盛に天下に行はれ操觚の士相率ひて之に歸す、獨り蘭洲此間に挺然卓立して非伊・非物・質

疑の諸篇を著はし以て其説を論駁す、傍ら國史群籍を治す。讀史訪・萬葉集話・古今通・勢語通・源語通の諸書

を著はし以て注家沿習の偽を訂す。家素より貧しと雖ども恬如たり。寶曆十二年歿す、年六十六、子なきを以て家絶ゆ、著書は以上に擧ぐる所の外に諺語・著語・兵論・新題百首あり。

【蹉跌】 サテツ。つまづく。しくじる。

【適然】 ケイゼン。迴然に同じ。迴は俗字。はるか、とほし。

【プラグマティスト】 Pragmatist

プラグマティズムとは實用主義又は實際主義とも譯す。

パース (Pars) が一八七七年に初めて此語を用ひ、後

ジェームズがまた此語を用ひて自己の説を述べるに至つて有名となつた。要するに、知識は實行の爲のもので、

人間は實行の爲に其の指導の觀念を要する所から、觀念や、思惟を働かす、故に行爲の爲に利益あるものが眞理

であるとの説。此説は絶對主義・理性主義・一元論に反對して、相對主義・經驗主義・多元論を取る。又此説は

知識の前に生活を立て、主知主義に反對す。而して其謂ふ生活は自然的生活である。生物學である。生活は環

境に對する適應である。此の適應の爲めに知識が働くと言ふ。

【デュウイ】 John Dewey 米國第一流の實用主義的哲學者。一八五九年生誕。コロンビア大學教授。ジェームズ

の死後、その實用主義の代表者として米國哲學界に重きをなしてゐる。彼の所謂「器具主義」(Instrumentalism)によれば、思惟(認識)は經驗的事物を配置して人間の總ゆる欲求を實現(満足)せんがための器具で、之が爲に有効に活動することが即ち「眞」である。換言せば經驗及び行動の擴大に有利な(即ち人の目的を満し得る)觀念が眞の觀念である。意志は思惟を使用して目的を達せしめる。「世界」とは吾々が合目的に造り上げつゝある過程で、「物」とは「云々として經驗されたもの」である。彼はこの主意的で目的論的な活動本位の實用主義を以て倫理・教育・社會學其他政治經濟上の諸問題をも論じてゐる。彼の著書では Psychology (1836), Democracy and Education (1916) 等が有名である。

【招集】 クンシフ。ひろひあつめる。招は多くひろひ集める意。

【程伊川】 テイイセン。名は頤。程頤、字は正叔、伊川先生と稱し、宋、神宗明道二年(皇紀一六九三)を以て生まる。人となり嚴正方直、當時著名の文學者蘇東坡と相争

ひ、門人互に相訛譏して、洛黨(伊川)、蜀黨(東坡)の二黨を生ずるに至る。後、事に坐して涪州に流され、赦されて後も屢々迫害せられたり。徽宗大觀元年歿す。年七十五、諡して正公と云ふ。兄の程明道、頤と共に二程子と云ふ。

伊川は氣質剛方、文理密察、峭壁孤峯の如く苟くも道に違ふあらば毫も假借せず、後人人格に於ては兄明道を稱し、學究に於ては伊川を推す。伊川の學は分解的、學究的なり。宋學は此の二程子によりて始めて其伴を具へたりと言ふべし。

【沈潜】 チンセン、水底にしづみかくれる事、轉じて心おちつき性やさしくして思に沈む事。

【呂叔簡】 ロシニクカン。明代の儒者。寧陵の人。字は叔簡。心吾と號す。萬曆進士となる。山西に歴官す。意を風教に留め、舉措公明なり。擢でられて刑部侍郎となる。朝に立ち正を持す。身を以て小人の悦ばざる所となり、奇禍に中らんとして遂に致仕す。年八十三にして歿す。彼少時は資質魯鈍、書を讀めども誦を成す能はず、乃ち

心を澄し體認、之を久うして了悟す。十五にして性理書を読み、欣然として會するあり、遂に致々として講學し、明道を以て己が任と爲す。著す所呻吟語・四禮疑・四禮翼・交泰韻・閨範・實政錄・去偽文集等あり。

【汲々焉】 キフキフエン。休まざる貌、いそがしき貌。

【恤ふ】 ウレふ。ふびんに思ふ。アハレムとも讀む。國語「在位者、恤民之患」

【體系】 タイケイ。何等かの原理によりて組織せられたる知識の統一的全體をいふ。故に體系は第一に單なる知識の集合又は事物の堆積と異り一は他と内面的に結合し全體は部分と論理的に關係する組織的構成でなければならぬ。併し體系の統一的全體は決して有機體のその如きものではない。其はあくまでも論理的關係であり、方法論的統一である。故に體系とは第二に學的知識の方法論的組織でなければならぬ。併し體系は單なる方法的形式ではない。其れは單に知識の分類或は事物の一般化を事とする方法論とは異り、其自ら事實に妥當にして統一的組織を構成すべき動的原理でなければならぬ。故に體系

とは第三に知識の全體を貫く統一的原理をいふのである。推論の根底に體系があらうといはれるのも此意味である。

【經驗】 ケイケン。極めて普通の語で特に解釋するに困難であるが、假に自己の自己以外より取得する事柄の總稱といふことが出来る。學術上並びに普通の用語について檢すると次の如き種々の場合が考へられる。

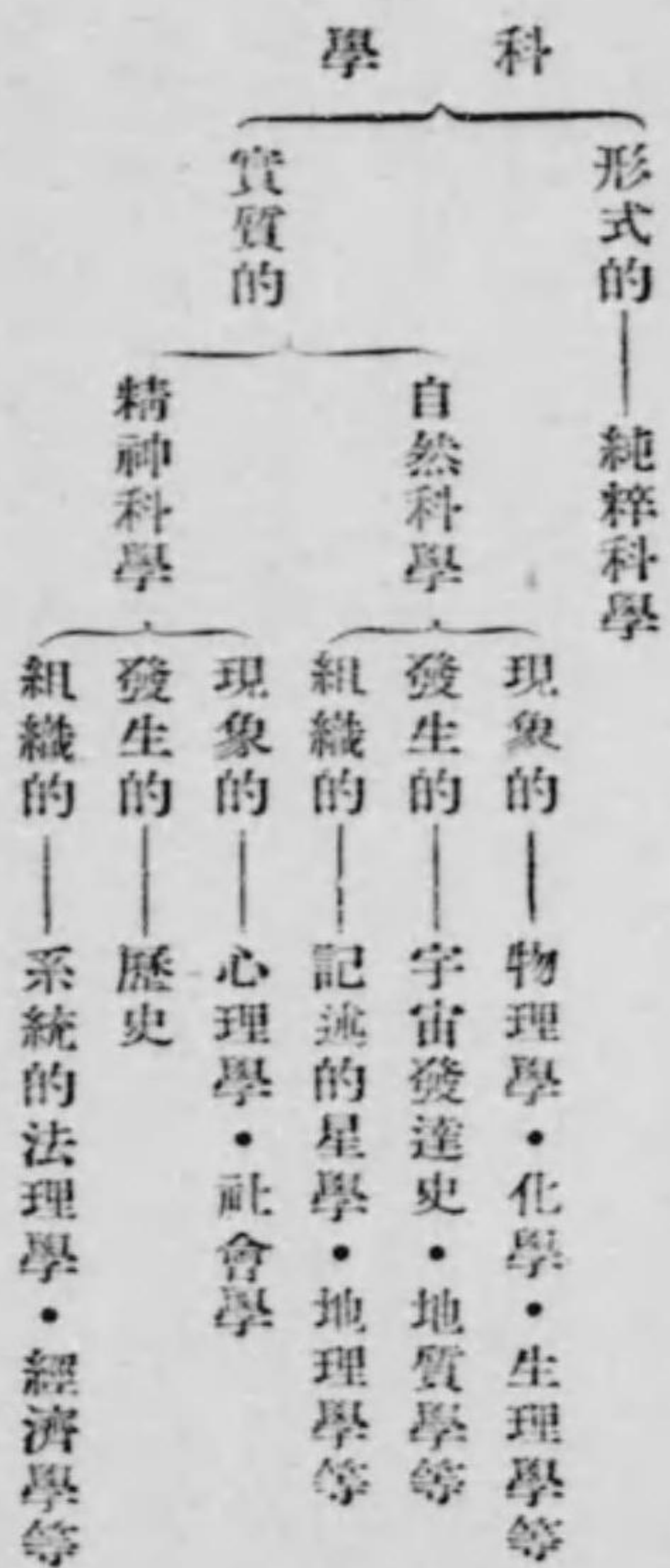
- 一、事實特に實際的事實の義
- 二、非組織的事實の義
- 三、外界の印象の義
- 四、外的及内的兩界活動から生じたる意識過程の義
- 五、現象と同義に用ふる
- 六、直接の意識過程(そのまゝに意識にあらはれるもの)
- 七、認識若しくは認識の原子

【經驗的】 これにも諸解がある。即ち

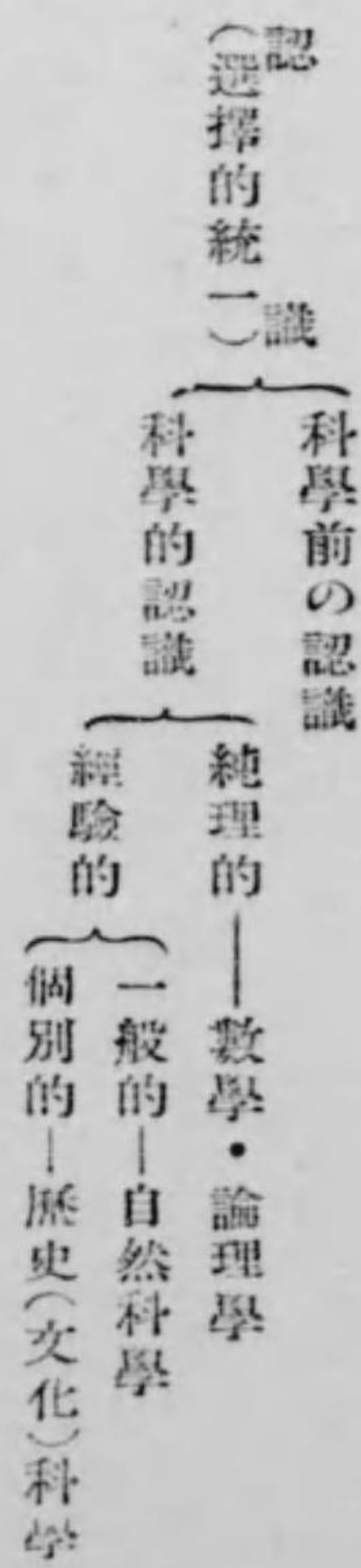
- 一、外界、或は内界に於て直接に我に現はれる事柄
 - 二、思慮反省を経ざる主客未分の境地の義。
- 故に「經驗的事實」とは我々が經驗(内的外的に直接に把

捉し得る)し得る事柄と云ふ意。

【特殊科學】 トクシユクワガク。個々の經驗的範圍を研究對象とする學問。即經驗科學と同義。哲學に對して科學と云はるゝのが即ち是である。ヴントは之を自然科學と精神科學とに、ヴィンデルバンド、リッケルトは自然科學と歴史學とに分つ。科學とは若干の假定の上に立ち、一定の認識目的の下に、合目的的選擇を施しつゝ、内外一切の經驗を、經驗的若くは、先驗的方法に従ひ、合理的に研究して得たる體系的知識である。科學の意義を明かにするには科學の分類を見るがよい。併し科學の分類は古來を通じて非常に變遷あり、如何なる標準により如何なるヴントの分類法



ヴィンデルバンドの分類



る方法を用ひて分類するかは是れ即ち哲學の任務であつて、哲學的根柢見解の異なるに隨ひ分類法にも差別が生ずると云はねばならぬ。

【觀念的】 クロンネンテキ。觀念としてあるもの。

觀念(Idea)とはプラトンの哲學にて始めて用ひられし語にして常住不變の實在を指す。彼に従へば感官の對象たる事物は無常轉變にして眞知の對象たる能はざるものなれども、觀念は完全常住恆存にして眞の實在たり。又眞知の對象たるものなり。觀念の世界は感覺世界の原型たり理想たるものなり。かくて Idea は又原型・理想・規範等の意にも用ひらる。

【理想】 リサウ。

完全なりと考へられたる状態。換言すれば之を實現せる

節意

第一節。初めから「判然たる考が無いからであらう。」まで。書出しの文章として昔の話を引出して學とは何かの疑問を爲してゐる。

第二節。「學は自由なる精神の自發的の行爲である。」まで。人間性と學の本質に就いて。

第三節。「又曰く『學不貴博貴於正而已』と」まで。

眞の學と物識りとの別。

第四節。「やがて學と同一視されるやうにもなつたのである。」まで。

眞の學と讀書について。

第五節。「眞の學人ではない。」まで。

學の價値と學人の態度について。

第六節。終りまで。

學の無限性に就いて。

とき充分なる満足を得べしと想像せられ、従つて之が實現に對して努力する事物の状態。理想は故に人々の知識・經驗の度によりて異なり、個人的なると共に又具體的なるを要す。又理想は完全なりと考へられたる状態なれども必ずしも客觀的實在性を有せず、されど又反對に空想にもあらず。吾人の意志行動の標的となり、意志行動の方向を示し、之を規正するもの、カントの言の如く、實踐的規正の意味を有す。理想は常に現實と相對す。故に或時代に於て理想として考へられたるものも實現せられて現實となるに至らば更に新しき理想を立て、無限に終止する所なし、而して是れ實に人類に無限の向上發展ある所以なりとす。

【當爲】 トウキ。Das Sollen の譯語。最も一般的の意味に於ては凡てあるべきこと、自己若くは他の意志に依つて要求せらるゝことを示す語。

【過程】 クワテイ。Process 凡て連續的、合目的なる進行・生成・發展、又は作用・變化。従つて普通に論理的の意味にもまた自然的の意味にも用ひられる。

師範國文第一部用教授備考 卷八終

四版師範國文第一部用教授備考卷八

大正十五年六月七日	昭和十五年六月七日	昭和十六年十一月	昭和十七年十一月
日發行	日發行	日發行	日發行
再版	再版	再版	再版
修正版	修正版	修正版	修正版
印刷	印刷	印刷	印刷

非賣品



編者

光風館編輯所

東京市神田區神保町一丁目五番地

發行者

上原才一郎

東京市神田區神保町一丁目五番地

發行所

光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
(振替口座) 東京三二七番

印刷者

吉原良三

東京市牛込區早稻田鶴卷町一〇七番地
株式會社 康文社印刷所

吉田彌平編

昭和六年十二月二十四日
文部省檢定濟

師範國文 第二部用

洋裝全貳冊

光風館編輯所編

師範國文教授備考 第二部用

上製全貳冊

